

一流の田舎まちを 目指して

「お前は、スーツを着て涼しいところで働く仕事につきなさい」これは、油まみれになりながら自営業を営み、「子どもには自分たちでつくった野菜を食べさせたい」と小さな畑で野菜をつくってくれた父親の言葉です。

まさか、今こうして「食」や「農」を核とした杜づくりを企画・運営するとは全く想像していませんでした。私がこのプロジェクトに全力を注げるのも、小さな頃に父親と一緒に土に触れていた経験があったからだと言改めて実感しています。

農政なんしょ…

農政課の異動が決まり、私は正直、心の中で「えー」と思っていました。というのも役所の花形は、総務や財政、また

は税務関係などというイメージが私の中にあり、農政というと、小さな頃の父親の言葉からも農業なんて儲からない産業だし、つまらない業務（そんなに重要な仕事ではない）だと勝手に判断していたからです。

しかし、農政課に異動し、農家の実態や農業事情を目の当たりにした私は、つまらない業務というイメージは消え、今農業をみつめ直さなければ明るい北杜市にはつながらないと感じるようになったのです。

このような想いが強くなったのも、小さな頃に体験した経験はもろろんのこと、それ以上に農政課に異動してからの「人」への出会いがとて大きな影響を与えています。



浅川 裕介

北杜市産業観光部食と農の杜づくり課

【あさかわ ゆうすけ】1980年山梨県北杜市大泉町生まれ。平成14年、旧大泉村役場に就職（平成16年11月に7カ町村が合併し「北杜市」が誕生。平成18年3月に小淵沢が加わる）。平成19年11月に食育・地産地消を推し進めるための庁内プロジェクトチームを立ち上げ、平成20年度より“食と農”健康な杜づくりプロジェクトを立ち上げる。平成22年度より、全国的にも珍しい「食と農の杜づくり課」というユニークな課が立ち上がり、身土不二を重んじた食育・地産地消活動を展開。

まず、私を大きく変化させた出会いは、当時の農政課のリーダーだった保坂智之という人物です。このリーダーは、机に向かっているところを見たことがなくらい。晴れている日は、外を歩き回っている人でした。また、携帯番号を必ず教え、24時間態勢（気持ちの問題として）でした。そんな姿を見て、私も名刺に携帯番号を記載し、今では、どこでも見る事ができるフリーメールを活用して、メールには「基本24時間ですが、寝ている時もあります」というメッセージを入れていきます。

さて、私が今企画・運営しているプロジェクトの原点は、農政課での経験だったり、そこで出会った「人」の想いです。先ほど紹介したリーダーは、私が異動してくる前から高齢化して農業がで



くなることで耕作放棄地が発生してしまうという負の連鎖を止めるべく、地域の同じ志を持った農家集団からなる農業生産法人の育成に力を入れていました。平均年齢65歳、年寄りかもしれないけれど、僕たちよりパワフルな人ばかり、そんなお年寄りたちが「どうしたら地域を守れるか?」「先祖が守ってきた農地を次の世代に残せるか?」という議論を毎晩遅くまで重ねていたようです。

私が異動してきた時は、既に6法人18組織(任意組合)の農家集団が立ち上がっており、耕作放棄地は抑制につながっていたのです。そして、私たち職員が分散して毎月開催される定例会に参加し、一緒になって地域の未来を語り合っていたのです。しかし、毎晩議論し悩んでも、それを消費者に伝えることができていなかったのです。

そんな時、リーダーから薦められ1人5万円もする研修に行かせていただきました。そこで、次の出会いが待っていたのです。

出会いが人生を変える

「食と農」健康な杜づくりプロジェクトは、愛媛県今治市の安井孝さんとの出会いが原点です。話を聞いた瞬間、直感的に北杜市に今必要なことだと感じ、研修から帰って早々、課の仲間に、今必要なことは「いただきます」と「ごちそうさ

ま」だと話したことを今でも覚えています。1日に3回、1年で1095回、一生に約9万回口にする「いただきます」と「ごちそうさま」は、私たちの食農教育の柱です。

「いただきます」は「あなたの命をいただきます」という意味であること。「ごちそうさま」は、必死になって食材を集めてくれたり、食べるまでに汗を流してくれた方々への感謝を込めた「ごちそうさま」という意味であること。当たり前のことですが、物があふれる今日において、この言葉の本当の意味は忘れられ、ただの号令となっているのが実態ではないでしょうか?

さて、安井さんとの出会いからすぐ北杜市で今治市の講演会を実施しようと企画を始め、同時に、庁内の横断的組織を立ち上げ、農業の危機的状況の情報共有や生活習慣病の情報共有など、単純な問題ではない食育・地産地消問題をみんなで議論しようと考えました。農政課への異動前は国民健康保険の担当で生活習慣病に対する意識はあったため、非常に仕事を進めやすかったです。

研修から帰ってから3カ月後、安井さんを招いた講演会をすることができました。今治市の取組は多くの方々共感していただくことができ、これから北杜市が進めようとしているプロジェクトにも大きな力になると確信できました。

安井さんとの出会いが、次の出会いに発展しました。それは農林水産省の高島賢さんと食育先進地である小浜市の中田典子さんとの出会いです。

農林水産省の高島さんとの出会いは、全国で3団体が採択されるという「地産地消モデルタウン事業」へのチャレンジのきっかけとなりました。募集締め切りまで2週間、3週間しかありませんでしたが、庁内プロジェクトチームで議論し、皆からアイデアをいただき、なんとか書類提出はクリア。後は、農林水産省が設置した第三者委員会でのプレゼンでした。

プレゼン当日は、当時の農政課長とリーダーの3人。北杜市の順番が来たと同じ時に「お前が頑張れ」と課長とリーダーは後ろに座り、自分がプレゼンをしました。あまりの緊張に膝がガクガクだったことは、今でも鮮明に覚えています。あの時貴重な経験をさせていただいたからこそ、目標としていた学校給食の重量ベースで40%という目標を3年間で達成できたのだと思います。

次に、食育先進地として有名な福井県小浜市の中田さんとの出会いです。中田さんとの出会いは、総務省「地域力創造アドバイザー」という事業によって実現しました。

以前から小浜市が推進する「キッズ・キッチン」に着目していましたので、このご縁が非常に楽しみで仕方ありません

「おやこ食育教室」の様子。包丁のルールさえきちんと教えれば、子どもは目の前の野菜と向き合い、素晴らしい成長を私たちにを見せてくれる



でした。北杜市から小浜市まで、車で5時間くらいの距離です。私たち北杜市は、相手の懐に入らなければ何も学べないだろうということで、延べ6人の職員が2週間程度、小浜市の職員として食育の取組に触れました。

初めて体験する「キッズ・キッチン」は、見守るといふ難しさを全身で感じ、2時間くらいの取組なのですが、「日中走り回ったのでないか？」というほどの疲労感。本当に子どもたちから沢山のことを学ばせていただいたと感じています。

北杜市では、これまで進めてきた「おやこ食育教室」に小浜市で研修してきた「キッズ・キッチン」のエッセンスを足し、北杜市独自の「おやこ食育教室」が現在開催されており、多くの保護者から「子

どもの本来の能力を見ることができた」「意外とやらせればできるもの」などの意見をいただきました。

私たちのプロジェクトは、人のつながりや人の輪がここまで成長させてくれたのだと日々感じさせられます。と当時に感謝し、これからも人と人の縁が私たちの取組に力を与えてくれるのだろうとワクワクしています。

食と農の杜づくり課の誕生

「食と農」健康な杜づくりプロジェクトは、平成20年からスタートし、食と農の杜づくり課が誕生する平成21年度までは、私が所属していた農政課で進めてきました。

その当時は、リーダー以下の若手中心のチームとして、活発に議論する環境をつくろうと心がけてきましたが、縦割り社会の中で横断的な取組をするのは、参加する方々へかなり負荷をかけることになり、思うように進まないことばかりで、日々悩む毎日でした。

そんな中、当時の私の上司（保坂）が、若手職員と市長とで討論する場を設けてくださって、何が上手くいかないのか？という膿を皆で出し合いました。結果、市長が「課をつくるか」と言ってくださって、1年期間をおいて、平成22年度に「食と農の杜づくり課」が誕生したのです。

私たちのプロジェクトの骨格は、地域

の小学生ができました。どういうことかという、市長と子どもたちに一緒に給食を食べてもらう機会をつくり、そこで、子どもたちから北杜市への想いを語ってもらったのです。

すると、子どもたちからは「おいしい野菜が採れる地域なので地産地消で北杜市を盛り上げることができないか？」「農薬の検査をしているのですか？（ちょうど中国の冷凍餃子問題の3日後だったので）」「自分の家の野菜などを使えないのですか？」など、素晴らしい意見が出てきました。

そこで、10年、20年後の北杜市の健康（人、自然、文化、経済など）につなげるためにも、「次世代を担う子どもたちのため」に人と土は一体であるという「身土不二」を重んじ、安全・安心をただ口にするのではなく、普段食べるものがどうやってできるのか全身で知ってもらいたいと思ひ、「教育ファーム」「おやこ食育教室」「地域に根ざした学校給食」の3つを柱に事業展開してきました。

「教育ファーム」は、保育園・小学校と2つのライフステージで展開しています。感受性が非常に豊かな子どもたちです。裸足で土に触れ、匂いを嗅ぎ、耳をすませ、実際に食べるといった五感をフルに使う体験事業としています。北杜市子どもたちは、目を閉じて「トマト」「ナス」「ピーマン」「キュウリ」「カボチャ」



「地域に根ざした学校給食」感謝祭で、子どもたちから生産者に贈られた金メダル。地域の「絆」が地域を支える

「地域に根ざした学校給食」感謝祭で話を聞く。「虫との戦い！」と生産者



の苗を当てることができるのではないでしょうか。

裸足による体験の他に、もう一つポイントとしていえることがあります。それは、自分たちの目の届く範囲での体験です。野菜も同じ生き物です。子どもたちは野菜の「お父さん」「お母さん」になるわけで、世話をしなければ枯れてしまいますし、可愛がり過ぎても腐ってしまうということを感じてもらったり、命への責任を養うために手の届く範囲を重視しているのです。これには素晴らしい効果があります。手の届く範囲ですので、野菜への愛着も

格段に違いますし、何より自分で野菜を栽培すると不思議なことに、好き嫌いがなくなるといふことです。

次に「おやこ食育教室」です。このおやこ食育教室は、食育先進地である福井県小浜市の「キッズ・キッチン」の手法を取り入れていきます。

北杜市では、親子の「絆」を養うために親子で料理を行い、親は子どもの近くで手を出さないように我慢する仕組みとなっています。

これにより、子どものやる気をのばすために大切な「見守る」ということを学ぶきっかけになります。これは、口で言うことは簡単ですが、本当に難しいことです。私にも子どもがいますが、ついつい「危ない」「早くしなさい」など子どものやる気を奪ってしまう言葉を口にしてしまうものです。

平成22年度からは、保育園の園庭にある畑から作物を収穫し、それを子どもたちが調理する「おやこ食育教室」に進化しています。

最後に「地域に根ざした学校給食」です。この取組は、多くの自治体でも悩み苦しんでいる問題ではないでしょうか？

しかし、地域物流の見直し、地域内循環型経済を育成することは、苦しみ以上に閉塞感ただよう地域経済を脱却する何かがあると私は考えています。ただ、本当に苦しいことが沢山です。

私たちは、当時3年間で重量ベース40%まで地産地消費率を上げるという大胆な目標数値を掲げ進んできました。県をはじめ、様々な媒体から「こんな数値は見えない」などと言われましたが、平成22年度末には42・8%と40%を大きく上回ることができました。

この目標を達成するために、地域に「地産地消ステーション」と名付けたミニ市場をつくり、地域農産物が集まり、地域業者が買い付けに来るといふ仕組みづくりを行いました。地域生産者と地域業者の合意形成をはかることに時間を費やし、梨北農協と商工会のバックアップがあつたお陰で完成した素晴らしい地域内流通です。

今後は、この仕組みをベースに学校給食課がもつともっと良くなってくれると期待しています。

ローカルマーケティング

先ほど紹介しました「地域に根ざした学校給食」の物流は、ただ学校給食のためだけに構築したものではありません。その先に見据えたものがあつたからです。それは「エコひいき地産地消協力店登録制度」です。

この事業は、北杜市が全国に誇る自然の恵みから育まれる農畜産物を積極的に活用し、この素晴らしい大地を次世代に残すために環境保全にも取り組む事業者

田んぼや畑は、ただ単に、私たちが食べる食べ物の生産工場ではない。そこには、沢山の「いのち」が誕生し、循環している



を、北杜市が積極的に応援しているというものです。ちなみに「行政がえこひいきするとはどういうことか」という意見もありましたが、私たち食と農の杜づくり課では、絶対に「えこひいき」を押し通したい理由がありました。それは、現状の地域経済の低迷を脱却するためには、昔ながらの地域が地域を「ごひいき」にする流通を再認識させたいという想いがあつたからです。そして、この地域が地域を支え合う姿が活発化することで、より多くの観光客の方々が北杜市を「ごひいき」にしてくれるだろうと考えたからです。

なぜこのエコひいき事業と学校給食の物流が関係するかというと、「エコひいき地産地消協力店登録制度」を始める前か

ら、絶対に「地域物流がないから地産地消ができない」と地域事業所の皆さまに言われると予測していたからです。

いきなり地域事業者を対象に地域内物流を確立しようとしても、課題が沢山で難しく前には進みません。そこで、学校給食における地産地消の流れを活用し、本来の流通の仕組みに組み込んでいこうと考えたのです。なお、農家が直接学校給食に地域農産物を納品して、表面上の地産地消割合が上がったとしても、根本的な解決にならないとも考えていたためです。

こうした基礎部分の構築を進めながら平成23年度に始まった「エコひいき地産地消協力店登録制度」は、初年度に49店舗の地産地消協力店を登録し、地域内農工商連携、地域内6次産業化を目指し、マッチングのお手伝いをさせていただいています。現在、「ひまわりハチミツ」プロジェクトをはじめ、エコひいきコーナールの設置など、登録をされた事業所方の横の連携、協同で「一流の田舎まち」に向けた活動が進んでいます。

そして、「縦割り社会」と言われる私たち市役所でも、担当や課の境界、さらに組織の境界を越えて、庁内の関係組織をはじめ、商工会、JA梨北と連携し、皆で地域の課題に向き合い、解決に向けて期的に議論を繰り返しています。

今、私たちがやっている

「みつめよう！食の原点」を合い言葉に、土を耕し、手がゴツゴツのお百姓さんたちが主役になる食育・地産地消の推進を心がけてきました。食育も流行的な部分を感じられますが、これでは根本的な解決にはつながらないと思っています。

私も子どもを持つようになり、小さな畑ではありますが親父の手伝いをするようになりました。小学生、中学生時代の「やらされた」とは違い、今度は自らの意思で父親が私にしてくれたように、自分の子どもにしてあげる番だと感じています。

実際野菜をつくるようになると、野菜の裏側に込められたつくる人の気持ちも見えてきます。毎年同じようにはつくれませんし、難しさが沢山ありますが、収穫した時の喜びは格別です。そして、身近な人がおいしそうに食べてくれることは一番の幸せです。

山岳景観日本一、オオムラサキ生息日本一、ミネラルウォーター生産量日本一、日照時間日本一と「山紫水明」とは北杜市のためにある言葉であり、この素晴らしい地域資源を残すためにも、基幹産業は農業であることを忘れずに、これからも、市長が目指している「一流の田舎まち」に向けて、歩んでいきたいと思っています。